

# 神々



# の住

# ま



# い



## 巨大な神殿・ 出雲大社の謎

「神話のふるさと」「神々の国」などと称される島根県出雲地方。この出雲地方の長い歴史と豊かな文化を代表する文化財として、さらに観光スポットとして広く知られる神社が、簸川郡大社町にある出雲大社です。「ここには知っているようで意外に知らない、出雲大社の謎に満ちた歴史を、「建築」と「神話」をキーワードに迫ることにしましょう。

### 一、空にそびえる高さの謎 日本一の高さを誇る本殿

出雲大社の境内の中で、他の施設を圧倒する大きさを誇るのが、国宝でもある「大社造り」の現在の本殿です。江戸時代（延享元年＝一七四四）に建てられたもので、高さ八丈（約二四メートル）、平面は一辺三六尺（約一一メートル）の正方形で、神社としてはもっとも高く巨大な構えをしています。

世界？）を代表する皇祖神天照大神です。そして両者は大和地方から見ると北西（日の沈む彼方）と南東（日の昇る方向）の地理的關係にあります。偶然にしてはあまりに対照的なのです。古代出雲文化を考えるカギが、ここにも隠れているに違いありません。

### 神と仏を祀る宮？

鎌倉時代の絵図によると、本殿をはじめ境内の建物は朱色に塗られていたようです。江戸時代初期の頃の絵図では、建物が朱色に塗られ、境内にはお寺に見られるお堂や三重塔が描かれています。中世から近世初頭にかけてのある時期には、神前で僧侶が読経したり、仏像を安置したり、お堂を建てたりといった、種々の神仏習合が見られたようです。出雲大社もその長い歴史の中で、それぞれの時代、世相に応じた変化を遂げながら、今日の姿に至っているようです。

### 古代は高さ五〇メートル？！

延享元年（一七四四）に造られた現在の本殿は、江戸時代の初めごろにあたる寛文七年（一六六七）に造営されたときの形を引き継ぐものとされます。

大きな柱が繰り返された鎌倉時代から江戸時代の初めまでは、古代以来の規模を大幅に縮小し、「仮殿」と呼ばれる小さな社殿を幾度か建て替えていたようです。さらに時代を遡りましょう。本殿の高さは現在では八丈（二四メートル）ですが、社伝によると、平安時代には倍の一六丈（四八メートル）、さらに以前には三三丈（九六メートル）もの高さがあったとされています。とはいえ、この数字はあまりに巨大で、実際の資料も少ないことから、すぐには信じることはできません。

平安時代の『口遊』という書物には、「雲太・和二・京三」という記述が見られます。これは当時の大きな建物を表現したもので、雲太とは出雲大社が一番、和二とは大

### 神様は横向き

出雲大社の本殿前では、つねに柏手を打つ人の姿が見えませんが、しかし本殿内において出雲大社の神は、参拝者のほうではなく、向かって左側（西方）を向いています。つまり私たちは正面でなく、真横から拝んでいることになるのです。

これは本殿内部が、他の神社と違う独特の造りをしているからです（下図）。古来の住居構造の伝統によると、常世の国である海の彼方を望むためなく、さまざまに想像されています。

ちなみに、本殿内部をのぞくことはできませんが、天井には七つの雲の絵が描かれているそうです。

### 出雲大社と伊勢神宮

出雲大社はその大きさだけでなく、三重県伊勢市にある伊勢神宮の「神明造り」とも、荘厳な高床式建築物で古代の神社建築の様式をよくとどめているのも特色の一つです。一説には出雲大社が古代の高床住居、伊勢神宮が高床倉庫の伝統を受け継ぐものと言われ、両者は対照的な造りをしています。まさに神社界の東西両横綱といった風格です。参考までに、現在の出雲大社と伊勢神宮の本殿に見えるおもな違いを整理してみましょう。

出雲大社と伊勢神宮の祭神は、それぞれ葦原の中津國（地上の世界？）を代表する大國主命と、高天原（天空の

和（奈良）の東大寺大仏殿が二番、京三とは平安京の大極殿が三番の意味です。当時の東大寺大仏殿が約一五丈（四五メートル）と推定されていますので、出雲大社はそれ以上の高さを誇ったことでしょう。また、他の平安時代の文献によると、「突然、風もないのに本殿が倒れた」り、平安時代の中ごろから鎌倉時代初めまでの二〇〇余年に「七回も倒れた」という記録を見出すことができます。これは、ふつうの規模の神社では考えられないことでしょう。

最近の考古学の発達と発掘調査の飛躍的な増加は、私たちに古代の神殿と思われる建物の存在をさまざまに伝えてくれます。

鳥取県羽合町の長瀬高浜遺跡では、古墳時代初期の掘立柱建物跡が見つかりました。この建物は、周囲に柵を巡らし、直径約七センチ、深さ約二メートルもの柱穴を持っており、正面には長い階段が付属する大規模な高床建築と考えられます。神殿であった可能性が高いようです。



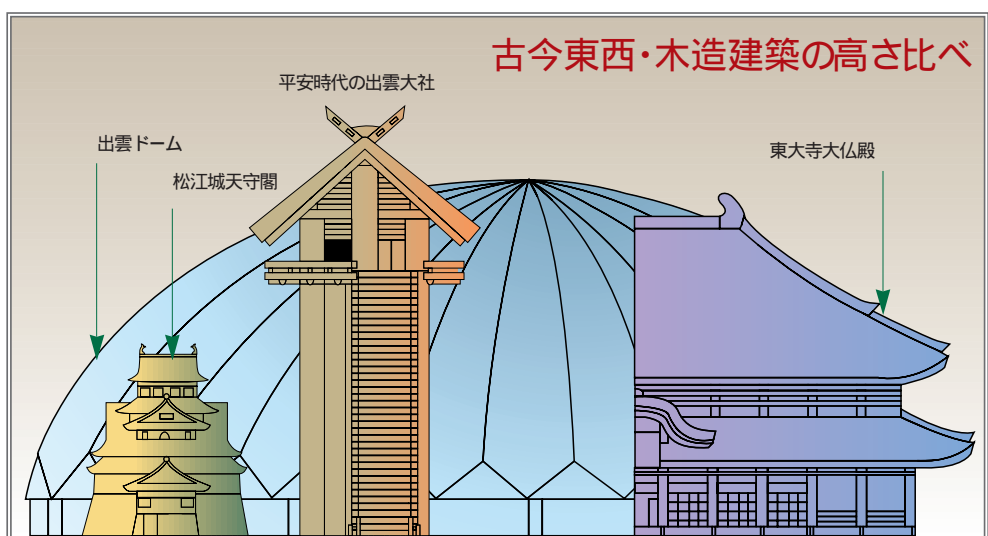
稲吉角田遺跡出土絵画土器  
写真提供：淀江町教育委員会

弥生時代には、九州北部や近畿地方において、通常の住居とは思えない大規模な掘立柱建物跡の発見が近年相次いでいます。銅鐸や弥生土器に描かれた絵画にも高床建物は多く描かれており、なかでも鳥取県淀江町の稲吉角田遺跡から出土した絵画土器は有名です。絵のモチーフは農耕にまつわる儀礼あるいは神話と推定され、その中に、非常に細長い柱と長い階段からなる高床の建物が描かれています。これが実在するならば、出雲大社とよく似た建物と見ることができそうです。

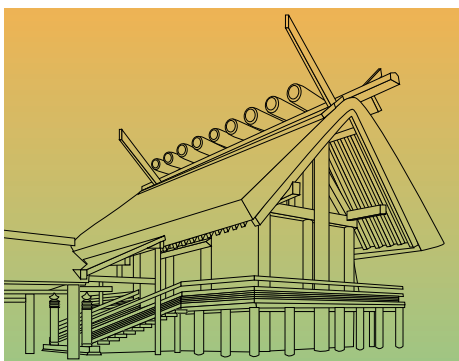
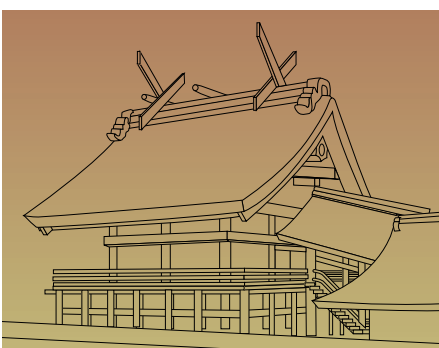
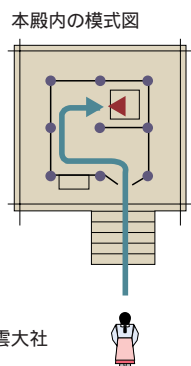
また縄文時代の建物跡として、直径が一メートルもある柱穴や加工された巨木が、新潟県や富山県、石川県などで発見されています。

二つした、巨木による建築や高床の神殿を造った文化は、日本海沿岸の諸地域で連続と培われ、それらがやがて出雲大社として結実したと考える研究者もいます。もしかすると出雲大社の源流は、はかりしれないほど古いのもかもしれません。

### 古今東西・木造建築の高さ比べ



	出雲大社	伊勢神宮
建築構造	妻入り、礎石建物	平入り、掘立柱建物 (二一年に一度建て変える)
高さ	高い24m	出雲の半分以下(9m)
神座	真横を向く	正面を向く



伊勢神宮